

令和7年度

茅野市非核平和事業

「広島平和の旅」感想文集



令和7年9月

茅 野 市

はじめに

本市が平成5年度から実施している非核平和事業「広島平和の旅」も、今年で30回目となりました。

原爆投下から80年目の夏を迎えた今年は、市内4中学校で「原爆パネル展」と非核平和学習を行い、これをもとに非核平和作文コンクールを実施しました。そして、全ての中学2年生の中から最優秀賞を受賞した8名の生徒を、8月5日から7日までの日程で広島に派遣しました。

この旅では、原爆が投下された8月6日に行われる平和記念式典への参列のほか、被爆者の方から直接体験談を聞いたり、平和記念資料館を見学したりしました。生徒の皆さんは、被爆地広島での貴重な体験を通じて、今まで学校で学んだこと以上に、戦争や原爆の恐ろしさ、そして平和の大切さを身にしみて感じたのではないかと思います。

また、広島を訪れる前に比べて、一人ひとりが『2度と戦争を起こしてはいけない』という気持ちをより一層強くしたのではないのでしょうか。

今回広島を訪れた8名の中学生が感じた想いをここにまとめました。この想いをいつまでも忘れずに、平和への取り組みを今後も続けていきましょう。

令和7年9月

茅野市 総務部 総務課

目 次

ページ

永明中学校	2年1部	川崎 空	2
〃	2年2部	須藤 美波	3
北部中学校	2年1部	柳澤 茉央	4
〃	2年2部	細川 さくら	5
長峰中学校	2年1組	向井 舞依	6
〃	2年3組	北原 陽菜	7
東部中学校	2年3組	橋場 信斗	8
〃	2年4組	小澤 颯太	9
平和への誓い（令和7年広島平和記念式典より）			10

80年前のあの日、私の曾祖父は広島の地にいた。戦地からの帰り道、被爆者の看病をしていた。この事を家族に話したのは、何十年も経ってからで、被爆者手帳を持っていた事を知ったのは、曾祖父が亡くなってからだった。私はこの広島平和の旅で、曾祖父が見たものを目を背けずに向き合おうと覚悟を決めて広島へと向かった。

初めて原爆ドームを見た時、驚きとともに怖さを隠しきれなかった。私は原爆が落とされた日を経験した事はないし、原爆の恐ろしさも分からないけれど、原爆ドームがあるその場所だけ、まるで当時を思い出させるような感じがした。原爆ドームの目の前には川がある。その川では、熱さから逃れようとして、多くの人が水を求めて川へ飛び込んだ。でも結局みんな、命を落としてしまった。私はその川を見ながら胸が痛くなった。どうしてこんなに多くの人々が命を落とさなければならなかったのだろうか。私はずっと、頭の中で考えていた。さらにその疑問が大きくなったのは、資料館へ行った時の事だった。一枚、一枚写真を見た。私が今いるこの場所で、こんなに悲惨な状況があった事が信じられず、言葉が出なかった。資料館にある物の全てがすごくリアルで、当時あった事を今の私達に強く教えているような感じがした。特に印象に残っている写真は、一人の男性が空から降ってくる黒い雨を飲もうと、口を開けて上を向いている写真だった。どれだけ水を求めているのか、どれだけ苦しかったのかという事が写真だけで伝わってくる。でも、資料館で見た物の全ては、当時あった事のごく一部だという事を、私は忘れてはいけないと思った。また、奇跡的に生き残ったとしても、今も苦しみを抱えながら生きている人がいる事を知った。私の曾祖父も、そのうちの一人だろう。信じられない状況を目の当たりにして心に深い傷を負い、思い出したくない記憶だったに違いない。でも、曾祖父が生き続けてくれたから、今私は生きている。

あの日、一瞬にして奪われた幸せ。多くの人々の命を奪った原爆。今暮らしている私達の国で起こったという事。戦争を知らない私達には関係ないし、怖いから目を背けてしまうのではなく、しっかりと向き合うことが大切だ。争いのない世界にするのは難しいかもしれない。でも、日々の生活の中で平和とは何かを考えて生活する事が平和な世界に近づける一歩かもしれない。そして2度と同じ事を繰り返さないため、次の世代へ語りつぎ、伝えていく事が大切だと思う。私は、「命をつないでくれてありがとう」と曾祖父に伝えたい。

2025年8月6日午前8時15分、黙とうの鐘が響く。今から80年前に起った広島原爆投下で亡くなった人々へ世界中の人々が祈りを捧げた。

私は、今回広島平和の旅の3日間で、原爆の恐ろしさ、被爆者の方の想いや平和を願う人々の想いを学ぶことが出来ました。特に私は2日目の平和記念式、8.6証言の集いや3日目の広島平和記念資料館が心に残りました。

平和記念式では、日本人だけではなく外国の方たちも多くみられ、世界中の人たちが平和をととても強く祈っているのだと感じました。式典では、内閣総理大臣や広島市長、広島子どもたちが平和について訴えていました。その中でも広島子どもたちの言葉がとても深く心に残りました。自分よりも幼い子たちが自分よりもきっと戦争のことを良く知り、沢山の人たちへ平和への誓いをしている姿をみてとてもカッコいいと思ったのと同時に私ももっと戦争や原爆のことについて学ばなければいけないと思いました。

8.6証言の集いで私は、長崎県で被爆された浅川晴恵さんのお話を聞きました。浅川さんのお話を聞いたとき、今では考えられないとても生々しく恐ろしいと感じました。この事実から目を背けてしまいたいとも思いました。けれども、原爆を経験した人が少なくなっている今、誰かが受け継いで今後の世代へ伝えなければいけないのだと思いました。その話の中で私は、「被爆と向き合うことは社会と向き合うことである」という浅川さんの言葉がとても印象に残りました。浅川さんは、原爆のときのことを思い出すだけで辛いと思うのにみんなの目の前で自分の体験したことを話しており、平和な社会をつくり今の社会と向き合うためにはとても覚悟が必要なのだろうと感じ、今の自分にはなにが出来るのだろうと考えさせられました。

広島平和記念資料館では、実際の原爆の被害がどれほどであったのか実感しました。爆心地の近くに居た人は影だけ残り、そうでなかった人も目や体にガラスの破片が刺さり、男女の区別がつかないほどの火傷を負っている姿の写真が沢山ありました。見ているだけで心が苦しくなりました。たとえ原爆で生き残ったとしても体や心に深い傷を負ったのだと改めて思いました、

私はこの3日間を通してより戦争のこと、原爆のことを知らなければならないと思いました。1つの原爆で沢山の人が亡くなり辛い想いをするという悲劇をなくすためには誰しもがその恐ろしさを理解する必要があると私は思います。いつか戦争のない平和な世界になるように祈り続けていきたいです。

自ら積極的に行動すること。あなたはこれについて考えたことはありますか。

私は今まで「社会を生き抜く為の1つの手段」程度にしか認識していない、否、できていませんでした。この捉え方に疑念というひびを生じさせることができたのは、広島の旅、2日目の「証言の集い」にて、ある被爆者の方の言葉を聞いたからです。「原爆と向き合うことは、社会と向き合うこと」。この方は当時「原爆と真剣に向き合えなかった」ことを悔やみ、被爆地から別の地へ移り住んでから原爆について学び始めたそうです。

自責の念にかられ、恥を忍び、必死に学んだと、そうおっしゃっていました。自分のことをすべて話していいから、恥もすべて話していいから、まわりの人達に、原爆のことを、当時のことを伝えてほしいとおだやかに語っておられました。

「原爆と向き合うことは、社会と向き合うこと」私は、この言葉に、その被爆者の方の歩んでこられた道が重みをともなって確かに存在しているように感じました。まさに「道のり」の如く、その方の半生を背負って長く、長く続いているように見えました。向きあいたくない、嫌なことからも目をそらさず、しっかりと一歩ずつ足跡をつけて歩いてきた人生。私は、私達は、そのすべての跡を見つけることは叶わなくとも、一つでもそこから自分なりの考えを見出していくことが大切なのだと思います。しかし、いくらそうして自分の考えをもてたとしても、他人とそれを共有できなければ、それがどれ程優れた考えだったとしても後世には伝わりません。先程になぞらえていうのならば、「足跡」は残りません。「自分の考え」をまわりに広めることができこそ、原爆と向き合い、社会とも向き合うことができた、と言えるのではないのでしょうか。

「考える」だけではなく、「伝える」。自ら声をあげて、他人とつながっていくことが、今の私達に必要なことなのではないのでしょうか。そうしたことをふまえ、改めて自ら積極的に行動することについて考えてみると、どうでしょうか。

再び問います。あなたはこれについて、どう考えますか。最初と同じ考えの人もいると思います。しかし、これに少しでも今までとは違うところからスポットライトをあてられた人、はたまた自分の視点ごと変えられた人も、いるのではないのでしょうか。稚拙な筆運びであることは承知していますが、私の考えを読んで、少しでも納得していただける部分がありましたら幸いです。その「他人には説明できないけれど、自分では感銘を受けたところ」やその時の思いを根源として、自分なりの考えをひろげることができたら、他の人に共有してみてください。そうした一人ひとりの行動が、大きな波として社会を動かすことができたら、平和への道も決して長くないはずです。

千里の道も一歩から。まずは身近なところから目を向けてみようと思いました。

私は今回、学校の平和学習の一環として、広島を訪れました。私はこの3日間を通して、戦争の悲惨さと平和の大切さを見て、聞いて感じることができました。

1日目は、「神の島」とよばれる宮島に行きました。フェリーで海を渡ると、海の中に浮かぶように立つ赤い大きな鳥居が目に見え、飛び込んでみました。世界遺産として有名な厳島神社はとても美しく、幻想的でした。また、島中に鹿がいて自然と共に生きている感じがしました。参道にはもみじ饅頭などの名物が並び、観光客でにぎわっていました。私は揚げもみじを食べたかったのですが、残念ながら食べられなかったので次に来たときは絶対に食べたいと思いました。自然と歴史にふれられた1日でした。

2日目は、平和記念公園で行われた平和記念式典に参加しました。原爆が投下された午前8時15分になると、周囲は一斉に静まり黙とうが行われました。その静けさの中で当時の人々の苦しみや悲しみを想像し、胸が締めつけられました。午後には「8.6証言の集い」に参加し、被爆者の話を直接聞くことができました。その方は胎内被爆者で、お父さんを見たことがなかったけれど、俳句で父親は近くにいると存在を感じていたそうです。お話の一言、一言に「2度と同じことを繰り返してはならない」という強いメッセージを感じたと同時に、次世代に伝えていかなければという責任を感じました。

夜には、元安川で行われた灯籠流しに参加しました。灯籠には平和への願いを書き込み水面に浮かべました。川を流れる灯籠の明かりはきれいでありながら、どこか切なさを感じました。まるで当時亡くなった多くの命の魂が川を渡っていくように見え、平和の尊さを改めて胸に刻みました。

3日目は、平和記念資料館を訪れました。被爆当時の写真や被爆者の衣服、溶けて形を失ったガラス瓶などが展示されていました。それらは想像をはるかに超える熱と衝撃を物語っており、見ていて胸が苦しくなりました。特に着ていた服に残った焦げ跡や血のしみは、その持ち主の痛みや恐怖を直接感じさせるようでした。展示の中には、被爆者が描いた絵もあり、そこからは言葉にならない叫びや、失われた日常への深い悲しみが伝わってきて、原爆がどれほど恐ろしいものか実感しました。見学を終えて外に出たとき、広島の青空がとてもまぶしく見えました。今こうして安心して過ごせる日々がどれほど多くの人の努力と願いによって守られてきたものなのかに気づきました。

私はこの旅を通して、原爆は町や建物を壊すだけでなく、人の心と人生そのものも壊してしまうことが知れました。そして、平和は決して当たり前ではなく、守るためには一人ひとりが行動することが大切だと思いました。この旅で学んだことを忘れず、周りの人に伝え、少しでも平和の輪を広げていきたいです。

最初広島に訪れた時、本当にここに原爆が落とされたのかと不思議に思うほど、とても平和で活気のある所でした。でもそれは、広島の人が一生懸命作りあげたものだということを私は知りませんでした。

1日目は宮島に行き、いろいろな名所を観光しました。私が見た景色はとてもきれいで、とてもここに原爆が落とされたとは信じられませんでした。

そんな中、2日目。私は原爆がここに落とされたんだ、という証を見ました。それは原爆ドームです。原爆ドームは骨組みだけが残されており、内側のかべは焼けたあとがありました。この原爆ドーム一つがここであったことを忘れないように残されているんだと感じました。

2日目には、平和記念式典にも参加しました。式典には世界各国からたくさんの人々が訪れていました。私がお話をきいている中で、一番心に残っているのは、小学六年生の「子ども代表あいさつ」です。子ども代表のあいさつでは、広島県の小学校に通っている児童二人が平和への思いを語っていました。自分よりも年下の方が自分なりに考えを持ち、それを世界中の人に伝えるのはとても勇気がいることだし、平和を願っている姿に感動しました。式典に参加されていた多くの人々は皆、平和を願っていたと思います。それでも世界では戦争が続いていて、「こんなにたくさんの人が平和を願っているけど、平和にならないんだ」と平和への道のりの遠さを痛感しました。

2日目の午後は8.6証言の集いに参加しました。実際に被爆した方のお話は貴重な経験でした。私は胎内被爆された、寺田さんのお話をききました。寺田さんのお母さんが実際に被爆され、そのあとで目が見えなくなっていました。寺田さんの家は5人兄弟でお母さんは、「育てるのが大変だった」と言っていたそうです。ですが、そんな大変な中でも寺田さんのお母さんは生きることをあきらめませんでした。それはとてもすごいことだと思います。このお話をきいて命の重さや、命をどれだけ大切にしなければいけないものなのかをあらためて考えさせられました。

私たちは今、生きています。それは決して当たり前ではありません。分かっていたはずだけど、この旅を通してそれをより深く思い知りました。そして、今回の旅で見たり聞いたりしたことをこれから生きていくたくさんの人に話すことが広島に行った私たちの役目だと思います。

80年前の8月6日。たった一発の原爆で広島のみち、そして多くの尊い命がうばわれました。その歴史があるからこそ“平和”の重要さをずっと伝え続けてきてくれ、私たちは平和の日々を過ごせています。そのため、平和の毎日が当たり前だと思っていました。しかし、実際に広島で目の当たりにした原爆ドームや資料館内の展示物で戦争のおそろしさを痛感しました。

私が特に心に残ったのは、証言者の集いでの話です。私がお話をお聞きした方は胎内被爆（お母さんのお腹の中で被爆）した人です。お父さんは、原爆ドーム近くの警察署に勤めていて被爆して生まれる前に亡くなってしまったそうです。そのため、周りの人から「お父さん見たことないのかわいそうだねえ」と言われてきたそうです。自分も、お父さんとは会ったことがないから「写真の中にいる父」と思っていたそうです。しかし、還暦を迎えて出会った“俳句”を通して写真の中だけだった父が身近な存在に変わったそうです。また、慰霊碑に父の名前が刻まれていたことを思い出したとおっしゃっていました。

「窓口へ原爆手帳咳殺し」これは、ご本人がつくられた俳句です。原爆手帳を持っていると医療費が無償になったりと様々な制度があります。そのため、原爆手帳を持っているというだけで差別を受けるそうです。だから、気がねしながら窓口へいくというのをよんだ俳句です。決して、心が晴れるという俳句ではないけれど、被爆した方の心によりそってえがかれている俳句だと思います。実際に原爆というのを、目で見たり、体験したわけではないけれど、母からのお話や、俳句から読みとった情景をもとにお話ししてくださいました。私が、この話を聞いて感じたことは“平和”というのには願うだけではだめなのだと思います。言葉で表して伝えることによって聞いた人が平和について考えるきっかけとなり、平和の輪が広がっていくのだと思いました。「この話をいつか思い出してくれればいい。それでいいんだ…」とおっしゃっていました。80年前の広島のみちは今では信じがたい光景です。しかし、このあやまちをくりかえさない、平和を守るためにも、一人ひとりが事実を知り、心にとどめておくことがとても大切だと思います。

この平和の旅を通して、平和の重要性を再確認し、目で見えてきた私たちが被爆者の思いを語りつぎ、次世代につなげていきたいです。世界中の人々とともに手を取りあって平和の輪を創り上げたいです。

私は平和の旅に参加して感じたことが3つあります。

1つ目は広島平和記念式典に出席したことです。広島平和記念式典では子ども代表の平和への誓いや広島市長の平和宣言があり、特に子ども代表の平和への誓いはとても思いがこもっていて、鳥肌が立つほど平和に対する思いが身に染みて伝わりました。テレビでしか見たことのなかったものだったので、とても貴重な経験ができたし、平和に対する思いが変わったので良かったです。

2つ目は8.6証言の集いに参加したことです。8.6証言の集いでは実際に被爆された方から当時の事や原爆によって壊された生活の事などについて実際にお話を聞かせていただきました。私が聞いた方は胎内被爆者と言って、お母さんのお腹にいたときに被爆された方の事を言います。聞いたお話は胎内被爆された方のお母さんが原爆によって両目を失明してしまい、胎内被爆された方のおばあさんが失明したお母さんに「死のう」と誘いを受けましたが、「私は死ねない」と断り、目が見えなくても子育てや家事を行っていたそうです。しかも、子どもは5人兄弟と聞いて、本当にすごいと思ったし、自分だったら死んでいたかもしれないくらい大変だったと思いました。

原爆によって町や家が吹き飛ぶほど悲惨で苦痛なものだということは勉強をしている中で知っていましたが、お話を聞いて知らなかった原爆の真相が改めて分かりました。原爆の悲惨さや残酷さが別の形で学ぶことができた貴重な経験になりました。

3つ目は広島平和記念資料館に行ったことです。広島平和記念資料館では原爆が落とされる前の広島の姿と落とされた後の広島の姿が壁に大きく写真として貼り出されており、1つの爆弾がここまで町を破壊する威力があったのだと思うと、とても思いがこみ上げてきました。他にも原爆が落とされた時の状況を映像にしていたものがあったり、焼きただれてしまった三輪車、高熱により炭化してしまったご飯などが展示されていて、原爆の恐ろしさを身に染みて感じました。

私は広島に行って大きくこれらの3つの経験をさせていただきました。経験から皆さんに伝えたいことがあります。それは、皆さんにもっと原爆や平和に対する考えを今以上に持ってほしいということです。例えば原爆の悲惨さや恐ろしさに加えて、当時の人がどう思っていたのかという考えや平和とはどういうものでどういう状況だったのかを考えて、自分の意見を広げていくことが大切だと思います。

今、私たちに被爆者の方が当時の事を伝えてくださっているように、私たちも考えを広めていって、世界平和にみんなで繋げてほしいと思います。

私は広島へ実際に行く前までは、戦争や原爆の悲惨さについてほとんど知りつくして、広島へ行ったらそれが本当だったのか、それを確かめるくらいの気持ちで行くつもりでした。ですが、実際に広島へ行き、色々な物を見たり話を聞いたら、思っていたことと全く違っていたり、事前学習だけでは絶対に分からないことも沢山学べました。例えば、「8.6証言者の集い」では、原爆に実際に巻き込まれてしまった人だけでなく、巻き込まれてしまった人達を助けるため、爆心地や火の海に近づいた人々も被爆してしまっていたことを知りました。また、より鮮明に当時の状況を想像できました。そのため、落ちた直後も少し経った後も地獄のような状況が続く原爆は必要のない物という考えを日本だけでなく、世界各国の人々が考え、全員で協力し、核を無くしていく事が必要だと思いました。

次に、2日目、3日目に行った原爆ドーム、広島平和記念資料館では見たくないと思う物もあり気分が悪くなることも多々ありました。ですがそれを見て、事前学習で見た原爆が落とされて、火災が収まってから撮影された半壊している建物も残っている写真を見て思ったことは、浅はかな考えだったんだなと思い直しました。そして原爆の直後が被害者にとってどれだけ残酷で地獄のような世界が広がっていたかをしっかりと感じとることが出来ました。

また、原爆ドームでも実際に近くで太い鉄骨が曲がってしまっていたのを見て、改めて原爆の威力を実感しました。確かにこの旅では非常に生々しく恐ろしい話、目をそらしたくなるような原爆に巻き込まれ亡くなってしまった、体の一部が欠損をしてしまっている遺体の写真で正直気分を悪くしてしまったこともありました。ですが、だからこそそれを見て以前の私の考えがどれだけ適当な考えをしていて、戦争の恐ろしさなどに関心を向ける事なく、軽く受けながしてしまっていた気持ちが全く理解出来なくなりました。

まだまだ、原爆や当時のことが分からない、知らないことがあるとは思いますが考え直すことが出来ました。そして、当然、日本に暮らしている人だけが、原爆が必要ないと思うだけでは意味があまりないことは分かっています。

原爆や当時を見た人が減っているこの時代、少しでも当時を知らない人々に当時の悲惨さを伝えるため努力をしてくれている人々の意思を受け継ぎ、少しずつでもいいので、まずは私達が、身の周りの人達にしっかりと伝え、だんだんと世界に伝わっていき、核だけでなく戦争自体を減らしていける様にしたいです。なのでその第一歩として、私は今回の広島の旅で学んで知ったこと、しっかりと言葉で伝えられるかどうか分かりませんが、広島で感じとってきた事などを学年のみんななどに伝えられるよう頑張りたいと思いました。

また、平和記念式典の時、多くの外国人を見かけ、核を減らしたいと思ってくれている外国人もいると知り、少し安心しました。

平和への誓い（令和7年広島平和記念式典より）

いつかはおとずれる、被爆者のいない世界。

同じ過ちを繰り返さないために、多くの方が事実を知る必要があります。

原子爆弾が投下されたあの日のことを、思い浮かべたことはありますか。

昭和20年（1945年）8月6日 午前8時15分。

この広島に人類初の原子爆弾が投下され、一瞬にして当たり前の日常が消えました。

誰なのか分からないくらい皮膚がただれた人々。

涙とともに止まらない、絶望の声。

一発の原子爆弾は、多くの命を奪い、人々の人生を変えたのです。

被爆から80年が経つ今、

本当は辛くて、思い出したくない記憶を伝えてくださる被爆者の方々から、

直接話を聞く機会は少なくなっています。

どんなに時が流れても、あの悲劇を風化させず、

記録として被爆者の声を次の世代へ語り継いでいく使命が、私たちにはあります。

世界では、今もどこかで戦争が起きています。

大切な人を失い、生きることに絶望している人々がたくさんいます。

その事実を自分のこととして考え、平和について関心を持つこと。

多様性を認め、相手のことを理解しようとすること。

一人一人が相手の考えに寄り添い、思いやりの心で話し合うことができれば、

傷つき、悲しい思いをする人がいなくなるはずです。

周りの人たちのために、ほんの少し行動することが、

いずれ世界の平和につながるのではないのでしょうか。

One voice.

たとえ一つの声でも、学んだ事実思いを込めて伝えれば、変化をもたらすことができるはずです。

大人だけでなく、こどもである私たちも平和のために行動することができます。

あの日の出来事を、ヒロシマの歴史を、二度と繰り返さないために、

私たちが、被爆者の方々の思いを語り継ぎ、一人一人の声を紡ぎながら、平和を創り上げていきます。

令和7年（2025年）8月6日

こども代表

広島市立皆実小学校6年 関口千恵璃

広島市立祇園小学校6年 佐々木 駿